

令和 6 年 6 月 9 日現在

機関番号：82619

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12559

研究課題名（和文）農工具からみた古代東アジアにおける技術交流の研究

研究課題名（英文）A Study of Technological Exchange in Ancient East Asia from the Perspective of Agricultural Tools

研究代表者

河野 正訓（Kawano, Masanori）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・主任研究員

研究者番号：60634623

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本列島の古墳時代を対象に、古墳から出土する外来系農工具を検討したものである。外来系農工具のうち、とりわけ鉄柄斧に注目し、日韓の資料を特別観覧することで、その変遷や系統を中心に基礎的な研究を進めた。結果、日本列島の外来系農工具の位置づけを明確化し、単純に文化が朝鮮半島から日本列島に流入したのではなく、逆に日本列島から朝鮮半島へ逆輸入される形で農工具が伝わる事もありつることを指摘できた。

このほか外来系（渡来系）をキーワードにして論文・研究ノートや資料報告などを発表した。さらに東京国立博物館の展示で研究成果を紹介した。このように今後の研究を推進するうえでの、基礎研究を進めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

古墳時代を理解するには朝鮮半島との関係を理解しなければいけない。日本列島の古墳文化は、列島独自の発展をとげつつも、朝鮮半島からの渡来人による新たな文化を巧みにとりいれ、列島流にアレンジして発展してきたからだ。

本研究は、農工具という庶民から権力者層にまで関係する資料を対象に、農工具の系統を主にたどることで、関連する社会変化や生業の実態の背景に迫ったものである。結果、朝鮮半島と日本列島の交流の実態を垣間見ることができた。

研究成果の概要（英文）：This study examines exotic agricultural tools excavated from burial mounds in the Kofun period of the Japanese archipelago. Among the exotic agricultural tools, we paid particular attention to iron handled axes, and conducted basic research on their evolution and lineage through special viewing of Japanese and Korean materials. As a result, we were able to clarify the position of foreign agricultural tools in the Japanese archipelago and point out that the culture did not simply flow from the Korean Peninsula to the Japanese archipelago, but that agricultural tools could have been reimported from the Japanese archipelago to the Korean Peninsula.

In addition, he presented papers, research notes, and reports on other materials using the keywords "alien" and "migratory". In addition, he presented his research results in an exhibition at the Tokyo National Museum. In this way, we were able to advance basic research for the promotion of future studies.

研究分野：古墳時代

キーワード：農工具 古墳 外来系

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究の主題となる古墳時代の農工具は、必ずしも古墳時代研究の中で主流とは言えなかった。しかし、その中でも農工具に関する研究は一部の研究者により推進されてきた。本研究の代表者である河野も、学生の頃より継続して農工具の研究を進めてきた。これまでの研究をまとめると、古墳時代の農工具について木の柄や台と鉄刃との着柄方法を探り、鉄刃の使用・未使用を区分して、使用状況の検討を踏まえて鉄刃の非実用品を抽出する方法を開発した。また、古墳の階層別、地域別に使用品・未使用品・非実用品を使い分けて副葬していく古墳時代当時の状況を復元するのにも成功している。

これらの基礎研究を発展させる形で、古墳時代の農工具に関して編年研究を進めると共に、本研究のテーマである農工具の技術系譜に関する研究も進めている。農工具の技術系譜に関する研究史は、これまで種類や形が似ていることを根拠にして、日本列島で出土する農工具の中に朝鮮半島に由来するものがあり、とりわけ5世紀の渡来文化の本格的な導入をきっかけに普及することがわかっている。また、3世紀後半～7世紀にかけて5世紀ほどではないが、半島系譜の農工具が断続的に日本列島へ流入しており、まだ多くはないものの高句麗・百済・伽耶・新羅に系譜が追えるものもあることが韓国人研究者を中心に指摘されている。しかしながら、あくまで種類や地域の限られた個別研究に終始しており、通史的に捉えた研究はほとんどないのが現状である。

2014年には「韓日交渉の考古学 - 三国・古墳時代 - 」という国際シンポジウムが開催され、その分科会で日韓の古墳時代・三国時代の農工具に関するシンポジウムが開かれた。日韓の農工具研究者が一同に会する機会であり、それぞれの地域における鉄製農工具の種類や使用方法、所有の階層差、など多角的に検討が加えられた。そこでは系譜に関する問題も取り上げられ、現段階での研究の到達点がまとめられた。韓国国内では高句麗系・百済系・伽耶系・新羅系それぞれの国家において独自に作られた、高句麗系・百済系・伽耶系・新羅系の農工具があることが明示された。しかしながら、日本列島では半島系農工具という大きな枠でしか提示することができず、半島から列島へという一方向的な農工具の流れ、系譜を指摘するに留まった。そのため、日本列島内の技術系譜をより明らかにすることが、今後の課題として残された。

2. 研究の目的

本研究は、日本列島出土の古墳時代農工具を対象にして、朝鮮半島出土農工具と比較検討することで、日本列島出土農工具の技術系譜を明らかにすることを目的とする。これまで外来系(半島系)と漠然と理解されてきた日本列島出土農工具の系譜を詳細に位置づけることで、その製作背景にある技術交流の実態を理解することを目的とする。

さらに、農工具に対する理解がそもそも研究者間で低調であり、十分な基礎研究がなされていない事例も多い。そのため、今後の研究に資する資料を抽出し、資料紹介をもって詳細な実測図を提示するという基礎研究もあわせて行う。さらに、本研究の本質は日本列島と朝鮮半島の交流の実態を明らかにすることにある。そのため農工具を軸に、日本列島で出土した外来(渡来)系遺物についての研究も進めることにする。

3. 研究の方法

本研究は、まずは本物の実物資料を観察するという、基礎的な研究を堅実に行うことを重視している。古墳時代における鉄製農工具を対象にして、朝鮮半島の鉄製農工具研究とも比較検討することで、日本列島内の半島に技術系譜が追える農工具を明らかにする。とりわけ、鉄柄斧に関する研究を軸に、検討をしている。

日本列島内の資料調査では、高い精度の実測図を作成し、さらにマクロレンズによる細部写真を撮影することで、形のみならず製作技術の痕跡を資料化した。

また、研究途中にコロナ禍となり、十分な資料調査を実施することができなかつたので、東京国立博物館内の古墳時代農工漁具を集成する作業に入り、さらに過去の農工具に関する資料調査実績を再検討することで、少しでも研究が進展するように努めた。もちろんコロナ禍に入る前までは、韓国に訪問でき、関連する資料調査や博物館等の展示視察、研究者との交流を重ね、最新の朝鮮半島出土農工具の研究を把握するように努めている。

このような分析を行うことで、鉄製農工具を生産する実態がより明らかになり、製作背景にある技術交流の歴史を、日本国内のみならず東アジアという広い枠組みのなかで理解できるようになった。

4. 研究成果

本研究では以下の成果を挙げることができた。

(1) 日本列島と朝鮮半島の相互交流の実態

古墳時代の日本列島における鉄柄斧(鉄製柄付手斧)を対象にして、その変遷、系統、生産、

性格などを多角的に検討した。

まず鉄柄斧の身部形状を軸に各種属性の組合せから4群にわけ、型式学的検討を行い、その変化は日本列島内で連続的に理解できる事を明らかにした。また、これまで単一系統としての理解があった鉄柄斧であるが、複数の系統に分かれることも指摘した。

このような基礎的な分析を経て、鉄柄斧の考察を行なった。まず鉄柄斧の成立について、4世紀における朝鮮半島南部の加耶との交流を背景に、日本列島内で生産されたと考えた。このほか鉄柄斧の系統や分布から、複数の工房による生産体制であり、なかには地方生産もありうることを指摘した。そして、鉄柄斧を出土する古墳について検討を深め、とりわけ武器武具が豊富な古墳に副葬される傾向があることを追認した。鉄柄斧は木を削る工具としてよりも武威を示す道具としての性格が強いため、武人的な性格をもつ首長にとりわけ好まれたと位置づけた。

以上の研究は、これまで朝鮮半島から日本列島へ一方向的に農工具が伝わってきたとの通説に再検討を促す事になり、今後の研究の布石として重要である。なお、「考古学雑誌」に本研究を掲載し、季刊考古学の論文展望として選定され、山梨県立考古博物館の展示にも成果がパネルとして公開されるなど、学界では高く評価されている。

(2) 外来系農工具と関連資料

外来系農工具および関連する渡来系移住民の実態に迫るべく基礎研究を行った。具体的には、群馬県渋川市金井東裏遺跡出土品、埼玉県皆野町稻荷塚古墳出土品、岐阜県本巣市船来山古墳群出土品、山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土品、山口県山口市赤妻古墳出土品、山口県防府市多々良寺山古墳群を検討し、その成果をそれぞれ論文や報告書で発表出来た。また、山口県防府市黒山1号墳出土品については農工具が含まれないものの、関連する当時の海路についての研究をしており現在査読誌に投稿中である。いずれも実測図を提示し、今後の研究を推進する上での基礎的な研究を進めることができた。このほか研究期間中に実測した他の資料は、随時論文等で公開していく予定である。

上記の論考の中で、岐阜県本巣市の船来山古墳群の研究を紹介する。船来山古墳群からの出土品を検討し、外来系農工具が古墳時代後期に船来山古墳群でよくみられる現象の背景に、朝鮮半島からの渡来系移住民の移住を想定した。また、前期古墳やその後の古代の集落動向と、後期の渡来系移住民との関連性についても言及することができた。このように、外来系農工具と渡来系移住民とを具体的に結び付けることが可能な事例を紹介できたのは大きな成果であった。

(3) 古墳時代農工具の所有に関する諸問題

本研究は、技術系譜とはやや一線を描き、当初の研究計画にないものであったが、同じ古墳時代農工具の所有についての問題について研究を進めることができた。古墳時代を前半期と後半期に分けた場合の、農工具(鉄刃)の所有の変化は、当時の社会システムの変化に連動しているとの結論を導くことができた。つまり、農工具の所有が前半期ではヤマト王権含む各地域の上位首長にとって支配、階層秩序を維持するために、鉄刃が重要なアイテムの一つであった。しかし、後半期に入ると、地域別・階層別の所有の優位性が質量ともに解消に向かう傾向にあり、鉄刃の所有が必ずしも地域内の階層秩序の維持に必要ではなくなってきたことを示すことを明らかにできた。

本研究は、日本考古学協会の総会にて英語で発表され、国内外の研究者の注目を浴びた。

(4) 研究成果の公開

古墳時代の外来系農工具に関する調査研究に関する展示を、東京国立博物館の平成館考古展示室にて行い、研究の成果を一般にもわかりやすく還元した。このほか日本考古学協会の年報に「古墳時代の動向」と題して、農工具のほか古墳時代全般の研究動向をまとめた。なお、東京国立博物館所蔵の農工漁具についても集成作業は完了したが、公開まで至っていないので、今後の課題として残された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 88
2. 論文標題 山口県赤妻古墳出土品の来歴調査	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古文化談叢	6. 最初と最後の頁 97-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 74
2. 論文標題 古墳時代の動向	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本考古学年報（2021年度版）	6. 最初と最後の頁 24-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金宇大, 河野正訓, 荒木臣紀	4. 巻 693
2. 論文標題 埼玉県皆野町稲荷塚古墳の研究 - 単鳳環頭大刀を中心に -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 MUSEUM	6. 最初と最後の頁 7-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 157
2. 論文標題 論文展望 日本列島における古墳時代の鉄柄斧	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 760
2. 論文標題 有柄鉄斧	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 東京国立博物館ニュース	6. 最初と最後の頁 9-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 -
2. 論文標題 山口県萩市見島ジーコンボ古墳群の被葬者像	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 柳本照男さん古稀記念論文集 - 忘年之交の考古学 -	6. 最初と最後の頁 131-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 103
2. 論文標題 日本列島における古墳時代の鉄柄斧	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 -
2. 論文標題 岐阜県船来山古墳群の渡来系移住民 - 生産用具の検討を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昼飯の丘に集う 中井正幸さん還暦記念論集 -	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 -
2. 論文標題 第 5 章第 5 節 船来山24号墳出土農工具について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 本巣市船来山24号墳 東京国立博物館所蔵資料の調査	6. 最初と最後の頁 114-118
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 -
2. 論文標題 金井東裏遺跡の農工具	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 金井東裏遺跡 古墳時代編	6. 最初と最後の頁 465-468
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 河野正訓	4. 巻 106-2
2. 論文標題 山口県多々良寺山古墳群の角形把手付椀 - 防府市域における渡来系氏族 -	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 考古学雑誌	6. 最初と最後の頁 44-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 河野正訓・佐々木憲一
2. 発表標題 農具鉄製刃先の所有と社会システムの変化 - 古墳時代の西日本を中心に -
3. 学会等名 日本考古学協会第89回総会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------